名所物見の旅　其の六拾壱　上高地から穂高岳へ②

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

明神池分岐にて

昭和四十五年八月四日、穂高岳登山隊総勢十名は小梨平のキャンプ場を7時40分に出発した。幕営生活や登山は初めてという新人が半数を占める我が隊は、4時15分に起床したにもかかわらず、朝食準備やテントの撤収に手間取って、出発まで3時間半近くかかってしまった。それでも出だしは元気よく歩き始め、30分で明神池の分岐に到着した。穂高神社奥宮が祀られる明神池はここから数分の距離にあり、希望者は荷を置いて明神池を見学することになった。明神橋の吊り橋を渡ると、日本の登山黎明期の明治二十六年、ウォルター・ウエストンを前穂高岳に案内し、深い友情で結ばれた猟師上条嘉門次の嘉門次小屋がある。引率のS先生は、この小屋の手打ち蕎麦がとてもおいしかったが、最近管理者が変わり品書きから消えてしまったと残念がっている。明神池には参拝料が必要で、30円を支払って入場した。穂高神社の奥宮という場所にふさわしく、山深い静かな池は幽邃といった表現がぴったりだった。分岐に戻ると荷物番をしていたY先生がどこやらの女子高の一行と話し込んでいる。彼女らのキスリングザックには某有名大学付属女子高のネームが入っており、女好きのY先生は言葉巧みにお嬢さん学校の引率の先生に日程などを聞き出している。まだ恥じらいが残る年頃の我ら少年たちには、女子と交流するなどまっぴらごめんという気持ちがあり、皆で無関心を装って「今日はどこで昼食にしようか」などと話し合っていると、突然Y先生の発案によって道の真ん中でお互いの校歌や山の歌を歌わされる羽目になってしまった。嫌々ながらのことで腹立たしく、われわれは「Yのモノ好きにも困ったもんだな」と愚痴りあった。

涸沢まであと一息のところで、ザックを降ろして休憩する我が登山隊。いまは懐かしキスリングザックは、最近のリュックサックと違ってパッキングが難しく、荷造りするにも技術を要したものであった

明神池分岐から50分で徳沢に出た。ここは明治十八年から昭和十年まで牧場だった名残りの草原が広がり、井上靖の小説「氷壁」の舞台となった前穂高東壁への登り口である。徳沢園という宿は“氷壁の宿”と謳っていた。

圏谷の別天地・涸沢へ

北アルプス登山の表街道ともいえる上高地から梓川に沿った道は、徳沢や横尾までは傾斜も緩やかで道幅も広く、一般の観光客にもよき散策ルートとなっている。横尾は登山の重要な分岐点となっており、ここから槍ヶ岳、蝶ガ岳、涸沢経由穂高岳へと道は別れていく。まだ時間は早いが横尾からの登りに備えて早めの昼食を済ませ、梓川に架かる長い板橋で対岸に渡った。現在は頑丈な造りの立派な橋が架かる横尾も、その当時の板橋はよく揺れて何度もバランスを崩しそうになり、重荷を背負うわれわれは恐る恐る歩いた。道はいままでと打って変わって本格的な登山道となり、巨大な屏風岩の大岩壁を左に見ながら進み、途中で屏風岩側に谷を渡って沢沿いに歩いた。この谷沿いの道は、現在の登山道とは反対側の右岸を通っていた。沢を離れてから一気に涸沢まで急な登りとなり、次第に登山道は土からガラガラの岩屑に変わって涸沢が近いことを思わせるが、なかなか到着しない。われわれは初めての本格的登山で疲れ果て、グロッキーになる寸前のところで、やっと涸沢のテント場に到着した。時刻は4時26分、小梨平から9時間近くもかかった。

涸沢は半円形にえぐられたカール（圏谷）の底に位置し、わたしたちが一番驚いたのは、夏だというのに大きな雪渓が残り、色とりどりのテントが数え切れないほど張られていることであった。Y先生の説明によれば、大雪渓の正面上に聳える大きな岩稜が日本第三位の高峰・奥穂高岳で、そこから左へ弧を描いたような吊り尾根の先に聳える三つの岩峰が前穂高岳。奥穂高岳から右へ涸沢岳、涸沢槍と続き、右正面にある涸沢小屋から上部に延びる尾根の大きな峰が北穂高岳だという。岩と雪の殿堂と謳われる穂高の峰に囲まれたアルペンムードあふれる涸沢に来て、わたしはついにアルプスの一角に足を踏み入れたうれしさでいっぱいになった。

夏でも大きな雪渓が残る涸沢。正面の稜線が吊り尾根で、左のピークは前穂高岳。吊り尾根の右は奥穂高岳に続いている。現在のような軽くてしゃれたテントなどなく、四十一年前にはすべて重い家型テントだった。

テントの設営や夕食の準備などの役割分担が決まり、わたしは二年生二人と涸沢ヒュッテの炊事場へ水汲み役に指名された。水汲みを済ませ、大きなポリタンクを抱えてヒュッテの屋台の前を通ると、先輩は「おい、ラーメン食ってくぞ」と言い出した。わたしは先生に内緒でラーメンを食べているところを見つからないか心配であったが、先輩の命令は絶対である。ラーメンをすすりながらテントの方角を見ると、S先生がこちらを見ている。わたしが「S先生がこっちを見てますよ」と言うと、「心配するな。Sは目が悪いんだ」とまるで気にする風でもなく、平気な顔をしている。先輩らの神経の図太さに驚くしかなかった。

夕食後、先生や先輩は早々にシュラフ（寝袋）に入ってしまったが、われわれ新人五人は薄暗くなった雪渓の上ではしゃぎまわって遊んだ。初めてのアルプスに感激して、なかなか就寝する気にならなかったのである。穂高の稜線にはガスがかかり、よけいに高く大きく見える。

「いい加減に寝ろ！明日ばてるぞ」と呼びに来た先輩のNさんらに怒られテントに戻ってシュラフに入ったが、堆積岩の上に張られたテントの床はごつごつして、山馴れないわれわれにとっては痛くて、どうしたらうまく眠られるかと体勢を何度も変えなければならなかった。現在のように軽くコンパクトなマットなどもなく、先生だけは重いエアーマットを使っていたが、われわれのシュラフにはダイレクトに岩の硬さが伝わってくる。しかし「俺の背中に槍ヶ岳がある」などと騒いでいるうちに、今日の疲れもあって、いつの間にか眠ってしまった。

奥穂高岳へ登頂

翌朝4時に起床して外を窺うと峰々は雲に覆われていたが、日の出とともにガスは消え、願ってもない快晴となった。昨年登頂したので留守番をするという先輩二人をテントに残し、われわれ八名はおにぎりと水筒を入れたナップザックを背負って奥穂高岳へと出発した。涸沢の二人とトランシーバで無線交信しながら、岩のゴロゴロした道を一歩づつ登っていく。浮石に注意するよう指導を受けるが、山馴れない我ら一年生は何度か浮石に乗ってバランスを崩しそうになる。特に不器用なMは何度も足場を崩して落石を起こすので、そのたびごとに先生に叱られてかわいそうなぐらいだった。高山植物に詳しいY先生が、登山道のそばに咲き乱れるシナノキンバイ、ミヤマキンバイ、ハクサンイチゲなど、たくさんの花の名前を教えてくれた。このとき覚えた可憐な高山植物は、一生忘れ得ない花々となった。

ザイテングラードと呼ばれる岩尾根を登りきると白出乗越で、岩場にしがみつくように穂高岳山荘が建っていた。よくもこんな場所に小屋を建てたものだと感心していると、Y先生が山荘にいたおじいさんを目でさして「あの人が名ガイドの今田重太郎さんだ」と教えてくれた。日焼けしてがっしりした体躯のそのおじいさんは、72歳という年齢よりも、ずっと若く見えた。穂高岳山荘の経営者の今田氏は、昭和四十八年に引退するまで、この山荘で登山者の安全を見守っていたのであった。

疲れたので山荘で待つというS先生を残し、いよいよ奥穂高岳へ岩場の登りにかかった。岩場には梯子がかけられてあるので何の不安もなく通過し、そこからの岩稜の登りは一歩一歩天空に昇るような気分だった。ジグザグに付けられた道をどんどん高度を稼ぎながら登っていくと、右手に怪異な岩峰が現れた。ジャンダルムというピークで、前衛峰といった意味であるとY先生が説明した。ここからはほんのひと登りで、われわれは奥穂高岳山頂に立った。涸沢から２時間半、思ったよりも簡単であっけなく、危険に思うところも苦しいところもない、楽しいだけの岩稜の登りだった。雲が自分よりも足下にあるのが驚きで、標高3,190mの山頂からは素晴らしい眺望が展開していた。北アルプスの山々を見渡すと、ひときわ目を引くのが槍ヶ岳で、絶対登ってみたいと皆で話した。かくしてわたしたち一年生にとっての山旅は、この登頂で第一歩を踏み出したのであった。

岩を積み上げたような山頂には穂高神社の祠が祭ってあり、ガラガラの岩場を登って参拝した。後に分かったが、この山頂は実は巨大ケルンで、今田重太郎氏が長年にわたり積み上げたものであった。氏によると、奥穂高岳は日本第三の高峰にしては山頂が意外と狭く、霧の日などには登山者が迷うことも多かったので、大きなケルンを作る必要を感じてコツコツと積み上げ、昭和十六年ごろにはそれなりのものが出来、木の祠も石の立派なものに換えて安置したという。しかし戦後、これに飽き足らなくなり、土台から積み直して、3メートルの巨大なケルンを完成させた。山岳関係者から誰ともなく「重太郎は奥穂高を日本第二位にするために、ケルンを3メートル積み上げた」と噂されたが、最初からそういう意図があったわけではなく、人に言われてはじめて3メートルになっていることが分かったという。何メートルのケルンを築いても、公式な標高が変わるわけではないが、結果的に日本第二の高峰・南アルプス北岳の標高3,192m（*注）を抜いて、奥穂高が1メートル高くなったという顛末であった。（*注：北岳の標高3,192mは当時の国土地理院の公認値で、2004年登山者からの指摘による再調査の結果、三角点より高い地点が確認され、3,193mと認定された。）

奥穂高岳山頂の巨大ケルンをバックに登頂記念写真（昭和四十五年八月五日）。三角点（3,190m）よりも3メートル高いこのケルンは、穂高岳山荘の今田重太郎氏が戦前から数年かけて積み上げたもので（標高としては非公認）、穂高神社の祠が祀ってある。

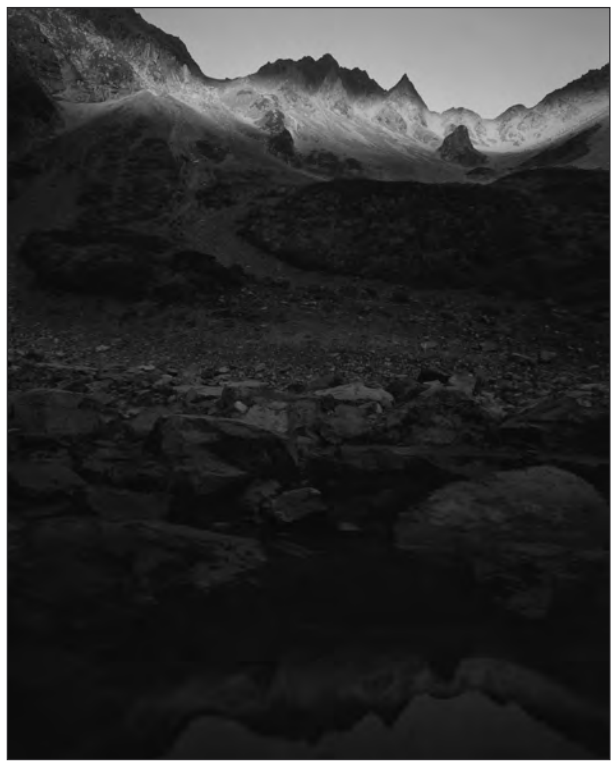
残念な下山

S先生が待つ穂高岳山荘に戻って昼食となった。山荘前のベンチからは梓川の谷の向こうに常念岳や蝶ガ岳がよく見える。昼食は気圧のせいで美味しく炊けないご飯で作った握り飯三個とたくあん漬け三切れ、それに粉末の「ワタナベオレンジジュースの素」をポリタンクに入れて攪拌したジュースだけであった。アルマイトの食器に分配したジュースは水の分量を間違えたせいで薄く、なんとも侘しい昼食だった。

ザイテングラードの下りで、昨日の女子高と再会した。Y先生は得意の高山植物の解説を始め、花の名前をひとつひとつ教えている。わたしたちによりも、もっと丁寧な教え方であった。だがわれわれは最後まで、彼女たちと一言も言葉を交わさなかった。山の硬派を気取る少年たちは、いまどきの軽いチャラ男とは一線を画す態度を示したのであった。

彼女らと別れた後、Y先生から思いもよらぬ決定がなされ、今日は涸沢ではなく横尾まで下って幕営するという。どうやら彼女たちが横尾まで下るらしく、Y先生は隣りにテントを張って交流を図りたいようだ。年配のS先生にこの決定を覆すように頼みたかったが、S先生は温厚だが自分の体力だけが心配で、すべてY先生の言いなりだった。今夜は涸沢の大きな岩に腰掛け、山岳文学書で読み知った憧れのアルピニスト・大島亮吉や加藤文太郎を偲ぼうと皆で話していただけに、なんとも残念な幕切れとなったのであった。

山の魅力を教えてくれたY先生には感謝してもしきれないが、数々のエピソードで山旅の印象をより一層強烈にしてくれたことも、生涯忘れ得ない思い出となっている。



涸沢池から黎明の涸沢岳。この池は例年雪渓が融ける八月末頃に出現するが、積雪が多かった年は夏を過ぎても雪渓で覆われ、池は姿を見せないまま新雪が来て冬を迎えることもある。

日本アルプス一の紅葉・涸沢

はじめての穂高登頂以来、涸沢は我が青春の舞台となり、夏休みにはテント生活しながら、穂高の峰々を登ったものであった。山旅の行き帰りに上高地から梓川の道を何度歩いたか数え切れないが、やはり初めての登山のときの思い出が、ことさら心に残っている。

昨年、久々に紅葉がよさそうだという情報を得て、一週間涸沢に入った。高い山の紅葉はデリケートで、夏の日照時間や秋の冷え込みによって、彩りは大きく変わってしまう。また台風が上陸すると、ナナカマドやダケカンバの葉が落ちてしまうことも多い。涸沢は日本アルプス随一の紅葉の名所で、九月下旬から十月上旬のシーズン中の登山者数は半端ではなく、山小屋は大混雑する。畳一畳に2～3人で寝かされるといったこともあるので、昨年はテントと一週間分の食料、加えて大型カメラなど35キロを背負って入山した。さすがに若い頃と違って、横尾からはとても重くて歩くことが出来ず、荷物を分けて二往復して涸沢まで荷揚げした。しかしその甲斐あって、近年では最高の紅葉に出会うことが出来、涸沢の秋を満喫した。今年も紅葉の季節を迎えたが、すでに台風が上陸したので紅葉の状況が心配である。果たして今年の彩りはどうだろうか、この時期になるとそわそわして、心は涸沢に飛んでしまう。